

拓殖産婆の活動

—北海道の地域特性・社会的背景との関連—

宮本涼子¹⁾ 前田尚美²⁾ 須藤桃代²⁾ 高橋弘子³⁾

1)天使大学大学院 助産研究科

2)天使大学 看護栄養学部 看護学科

3)前 天使大学大学院 助産研究科

天使大学 看護栄養学部 看護学科 非常勤講師

緒言

北海道は明治2(1869)年以降、国の施策として開拓使が置かれ開拓移住政策が進められた。

昭和2(1927)年より開始した第二期拓殖計画では、北海道の開拓地の医療政策として「拓殖産婆」が配置された。

先行研究では、拓殖産婆配置の背景、制度、活動内容について明らかになっているが、拓殖産婆の活動内容の詳細は不明である。

研究目的

拓殖産婆として活動した産婆に焦点を当て、拓殖産婆の活動の実際を明らかにする。

研究方法

1. 研究対象者

北海道別海町の拓殖産婆 下川原スエ氏（以下スエ）

2. インタビュー対象者

1) スエの長女、次男

2) スエの分娩介助を受けた80代の女性4名

3) 別海町の別地区で昭和27年から活動していた
元開拓助産婦1名

研究方法

3. 調査期間

2012年4～9月

4. 調査内容

- 1) 拓殖産婆としてのスエの活動
- 2) 昭和20～30年代の別海村における分娩状況

5. 方法

- 1) スエの関係資料の収集
- 2) インタビューガイドに基づく半構成的面接

研究方法

6. 倫理的配慮

対象者には文書と口頭にて研究の趣旨と倫理的配慮を説明し、文書にて承諾を得た。また、長女と次男にはスエの実名と資料の公開について、文書にて承諾を得た。

本研究は、天使大学研究倫理委員会の承認(2012-04)を得て実施した。

拓殖産婆とは

産婆不足の開拓地の首長が申請し、北海道より年額500円以内の補助金を受け、開拓地での助産業務に従事していた、

正規の免許を所有する産婆

- ① 指定学校もしくは講習所を卒業した産婆
- ② 産婆試験に合格した産婆


☆ 第二期拓殖計画(1927～1946)によって配置された

結果 当時の別海村(現 別海町)の状況



- ◆ 面積は東京23区の2倍
- ◆ 開拓開始、拓殖産婆配置時期は共に昭和2年
- ◆ 気候が悪く例年凶作のため、入植者の半分以上は離農した
- ◆ 町民の暮らしは、酪農が軌道に乗った昭和40年代に落ち着いてきた

結果 拓殖産婆 下川原スエの歩み

年号	産婆・助産婦としての活動	個人史
明治39(1906)年		北海道標津村で出生
昭和3(1928)年	産婆免許取得。東京等の医院に勤務	
昭和8(1933)年	北海道中標津村にて開業	
昭和10(1935)年	北海道別海村の拓殖産婆に任命される	移民世話所勤務の夫と結婚し、別海町へ転居
昭和21(1946)年	拓殖産婆制度廃止 開業助産婦として活動	 2男5女を育てる
昭和45(1970)年	北海道別海町母子健康センターに勤務(嘱託)	
昭和48(1973)年	助産婦廃業	
昭和53(1978)年	別海町功労者となる 勲六等瑞宝章受章	
平成6(1994)年		没(享年88歳)

結果・考察 拓殖産婆が置かれていた状況

拓殖産婆制度

行政によるリクルートで成り立っていた制度
補助金交付の年限は5年



人材確保・配置が不安定

中には夫と共に入植したものの、開拓失敗により開拓地を去る産婆もいた。

スエは移民世話所勤務の夫と結婚し、別海村に長年居住したため、村にとって大変貴重な存在であった

結果・考察 拓殖産婆としての活動①

広い担当地域と厳しい往診の状況

- ◆産婆不足のため、別海町の約半分の地域を担当していた時期があった
 - 当時の根室地方の地域別産婆一人対面積の**2倍**
- ◆産婦宅には徒歩、馬に引かせたりヤカー、ベタそりで向かった。春先には、産婦宅に着いた時に泥まみれになっていたこともあった

『電話電気もなく、熊の出るような笹やぶをかきわけ、迎えに来た男の人について歩くのも中々のものでした』

昭和初期の北海道の地域別人口1万対産婆数

- 地域別人口1万対産婆数が多いのは札幌市や旭川市といった都市部であり、郡部の檜山地方や根室地方は産婆が少なかった

別海村が含まれる

年次 地域	単位:人					
	全国	北海道	札幌市	旭川市	檜山地方	根室地方
昭和4年(1929)	7.62	8.12	15.11	17.15	4.01	4.05
昭和8年(1933)	8.68	7.78	12.68	10.24	4.53	5.68
昭和12年(1937)	8.74	7.51	12.02	10.23	5.55	5.50
昭和15年(1940)	8.53	6.33	8.35	7.08	4.49	4.54
昭和18年(1943)	4.76	6.84	9.88	8.08	4.90	5.61
昭和22年(1947)	8.62	6.55	7.87	7.08	記録なし	2.17

昭和初期の北海道の地域別産婆一人対面積

- 郡部の檜山地方や根室地方において産婆一人あたりが担当する地域が広範囲であった

別海村が含まれる

		産婆一人対面積 ※km ² 単位				
年次	地域	北海道	札幌市	旭川市	檜山地方	根室地方
	昭和 4年(1929)	42.567	0.154	0.154	105.493	570.651
	昭和 8年(1933)	39.880	0.090	0.230	79.140	328.830
	昭和12年(1937)	36.500	0.100	0.230	66.260	336.870
	昭和15年(1940)	42.820	0.140	0.350	81.400	363.460
	昭和18年(1943)	36.503	1.307	0.364	74.978	197.486
	昭和22年(1947)	37.128	6.062	19.241	記録なし	202.473

出典：北海道庁統計書

結果・考察 拓殖産婆としての活動②

当時の妊産褥婦の状況

◆ 風習や迷信が重要視される

『お産は汚れているからと窓もない暗い所に押し込められ、(産婦が)火のそばに来たら塩をまかれる』
『食事はお粥に焼き塩』

☆ 開拓地は移民の集まりであるため、出身都府県により風習や迷信は様々

☆ 産婦は婚家の風習に従う

結果・考察 拓殖産婆としての活動③

当時の分娩の状況

◆ 坐産

『畳をはいで藁を敷き、灰を敷き、ぼろ布を敷いて出産』

◆ 貧困家屋での分娩介助

『お星様の眺めるような、雪がスースー入ってくる家で、ほたて貝にあざらしの油を入れ燈心をともして、そんな明かりでお産をした』

◆ 必要物品の不足

『桶がないため醤油樽や、馬草をやる箱で沐浴した』

結果・考察 拓殖産婆としての活動④

経済的困窮状態の女性達の助産

◆助産料が支払われない、請求もできない

『他のものに比べたら高いため請求できなかった』

☆当時の助産料は3円、往診料は一里50銭

☆戦後も助産料が支払われないことは多々あった

(元開拓助産婦の語り)



産婆として活動するためには、補助金を受けられる
拓殖産婆の制度が必要

結果・考察 拓殖産婆としての活動⑤

医師不在の中での緊急時の対応

◆大抵の場合は家族や近所の人が出産の介助をしていた

→異常に転じてから往診を依頼される

※昭和27(1952)年頃でも、第一子の
出産時のみ助産婦を依頼

時には人殺しの汚名
をきせられたり……

◆産婦人科医の不在

『いざという場合に備えて止血剤、陣痛促進剤、強心剤だけは用意していましたが、違反になるので不安でした』

結果・考察 拓殖産婆としての活動⑥

開拓地の分娩状況

隙間風のみならず雪が入ってくる粗末な家屋
不衛生な環境
分娩に必要な物品の不足
産科医の不在

ギャップ



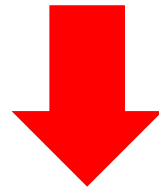
『学問的に習った者からみると、考えられないような原始時代に、本当にやりにくかったものです』

スエは正規の産婆免許を有し、過去には医院に勤務していた
→衛生的な分娩介助を実施し、異常時には医師と対応していた

結果・考察 拓殖産婆としての活動⑦

女性達を支える活動

- ◆長女出産1週間後には、分娩介助のため往診に出かけた
- ◆出産時に人手のない家では、洗濯・食事の支度までした



スエ自身も別海村で生活し、産婆として活動しているからこそ、弱い地位の女性達の生活が手にとるようにわかり、支援につながる

結論

1. 下川原スエは、昭和10(1935)年に北海道庁より補助金25円の辞令を受け、北海道別海村(現別海町)の拓殖産婆として開業した。
2. 広大な開拓地の悪路の中を徒歩や馬そりで移動し、不衛生な環境のもと、様々な工夫をしながら分娩介助を実施した。異常時には産科医の代わりをし、母子の命を救っていた。
3. 女性の健康よりも因習や生活を優先させなければならぬ時代の中、別海町で暮らす妊産褥婦の生活に合わせ、自らの産婆としての知識と技術を最大限に用いて、別海町の母子保健向上に寄与した。

2012年度の活動報告

◆資料収集・関係者へのインタビュー

2012年4月 別海町

2012年9月 札幌市

◆学会発表

2012年5月 第26回日本助産学会学術集会

2012年8月 日本看護歴史学会第26回学術集会

◆論文投稿

2012年度天使大学紀要 13巻1号

「昭和初期の北海道における拓殖産婆の活動」

◆最終報告書作成